

(仮) 宗教研究におけるフィールドワーク

—関連諸科学との比較から—

松井圭介

I はじめに

宗教地理学の視点

宗教というプリズムを通して、場所と人間とのかかわりを明らかにすること。

研究目的と背景

宗教研究におけるフィールドワークの方法・実践・課題について、関連諸学（宗教学、社会学、民俗学）における既往研究の検討を通して整理するとともに、宗教地理学への汎用性と宗教を対象とするフィールドワークの留意点について検討する。

日本における宗教の特性（松井 2003）

宗教の博物館
習合的状况

II 宗教のフィールドワークにかかわる方法論的議論

II-1 宗教学の視点

1) フィールドワークの定義

現実に生きている宗教現象の担い手たちとの人格的交流を通して、かなり長期にわたって具体的な宗教の現場と向かい合う方法に限って、フィールドワークと呼ぶ。

⇒ 従来、フィールドワークに基づく研究は軽視される傾向が強かった。

2) フィールドワークの有効性

フィールドワークの方法が適用できる宗教研究の分野は限られている。フィールドワークが最も有効なのは、現代の宗教現象。

主な研究対象

- (1) 組織的宗教の研究。例) 新宗教教団の実態解明
- (2) 人々の生活に根ざした教義的なかかわりが広くみられる宗教現象。例) 既成宗教（神仏基など）の祭典や活動に人びとがいかにかかわっているか。
- (3) 生活習俗や年中行事のなかに組み込まれた宗教的諸現象の研究。例) 民俗学的な研究；習俗・農耕儀礼・葬送慣行など。

3) フィールドワークの方法と視点

(1) 研究者としての能力：学問的文脈に位置づける能力

* 宗教そのものに対する理解，学問的な理解がなければフィールドワークはできない。

* フィールドワークは，信徒や地域住民との長期にわたる個人的な交流が必要となる。

⇒ 長期的な参与観察の必要性；祭典や儀礼での彼らの実践を観察したり，宗教を求める具体的な苦悩や救済体験などを聞き出すためには，一定信頼関係が前提となる。

*帰納法的アプローチ

研究者自身が、多くの人々とのさまざまな対話や観察のなかから、重要な課題に少しずつ気づくという場合が多い。系統的な質問項目に沿って有効な証言や資料が集まりだすのは、ある程度調査が進んだ時点から。また、現象を全体的に把握するためには、熱心な信者だけでなく、そこを離脱したり批判的な見解を抱く人々の意見を聞くことも必要。

⇒宗教研究の難しさ（個人的体験）

(2) フィールドワークの難しさ：共感的視点と批判性のバランス

*話者のポジショナリティー：資料選択の基準があいまいで、引用される事例が恣意的にすぎる、というものである。短期間の現地調査の場合、調査者は現場の第一印象の強烈さに引きずられて、その人々が集団内に占める位置や役割に対する反省を欠いてしまうことがある。

⇒影響力をもつ話者に対する注意

⇒資料の系統性

*研究者のポジショナリティー：内部か外部か？

⇒信仰と研究の問題

⇒調査対象との距離感

⇒宗教研究独自の難しさ（人間の実存にかかわる問題へのアプローチ）

(3) フィールドワークの倫理

*研究と宣教の区別

*プライバシーへの配慮

II-2 宗教社会学の視点

1) 社会調査としての宗教調査

*理論の重視、演繹的思考

社会現象としての宗教調査の視点；既存の理論的仮説を検証し、または統計的な推論を下すといった科学的な方法によらねばならない。

2) 宗教調査の種類と方法

統計的方法にせよ事例研究法にせよ、データ収集の具体的方法は共通する。具体的方法としては大きく、文献収集、観察法、質問調査、の3つ。

(1) 文献収集

もっとも基本的な方法。特定の教団を対象とした場合、その教団発行の教典、教義書、教祖伝、教団史、機関誌のパンフレットや、研究者・ジャーナリストによる既存の調査研究文献など。これらにはビデオソフトなど文献以外のものも含まれる。

(2) 観察法

調査者自身の主として視覚によって調査対象を直接観察し、調査対象のデータを引き出そうとする方法。

1 非参与観察法

調査者が調査対象の外側にいて、ありのままに直接観察する方法。調査者は信仰者の宗教的行為を価値中立的な立場からできるだけ客観的に観察しようとする。

⇒宗教の外在的理解：客観性と表面的理解

2 参与観察法

調査者が調査対象集団の中に入り込み、対象者の行動に参加しながら時間をかけて内側からありのままの姿を観察する方法。

⇒宗教の内在的理解：実存性と感情没入の危険性

(3) 質問調査

- 1 個人面接法（構造化／半構造化面接法）
- 2 配布回収法（留置法）
- 3 郵送法
- 4 託送法（教団や教会等の組織を利用して調査票を配布・回収）
- 5 集合調査法
- 6 電話法（インターネット法）

3) 宗教調査の手順と実際

社会調査としての宗教調査を考えると、調査の手順は、計画・準備→現地調査→結果の処理となる。

(1) 調査計画

- ①学問的・理論的な側面：問題の決定と仮説の構成および、それに見合った調査対象と査法の選定
- ②手段的・現実的側面：「人・金・時間」

(2) 現地調査

研究目的に適した調査対象を選択：その宗教を対象とするのか、その宗教のどのレベルに焦点を当てて調査をするのか、教団か地域か個人か、もし地域ならばフィールドとしてどの地域を選定するのか。

⇒適切な研究対象の選択

⇒調査許可の有無

⇒手持ち（調達可能な）資源の活用

現地調査に出るにあたって、調査票の作成、被調査者に対する協力の依頼（挨拶状の送付）、地域社会に関する基礎的データの収集は重要。

⇒現地調査では臨機応変に質問する。調査票にこだわらないことも必要。多くの調査経験を重ねることこそ、よい調査への最良の道である。

4) 宗教調査の特殊性と調査倫理

一般の社会調査と比較して宗教調査の難しさ。

(1) 内面世界を扱うことの難しさ

個人の回心の状況、入信の効果、人生観や信条といった内面世界は、個々人による内容の多様性もさることながら、インフォーマントが語る世界が調査者の日常的常識では理解できないほど異なる場合が少なくない。

⇒調査者はインフォーマントを共感的あるいは感情移入的に理解しようとする必要がある。人格的なふれあいを通して暖かい信頼関係（ラポール）を醸成できるように努力する必要がある。

(2) 対象者側からの理解と協力を得ること

教団によっては、調査を拒否するケースも多い。また調査の協力は得られても、研究結果を発表する段階で教団側からクレームがでることがある。

⇒対象者側におけるメリットとプライバシーの保護

II-3 民俗学・民間信仰研究の視点

1) 基本的な心構え

対象となる主体があくまでも人であること。人からの聞き取り、あるいは人の動きを調べることが基本となり、これに文献や史料そして教典類の調査が付随してゆく。

⇒対象としての「人」：常民、宗教者（僧侶・神職・僧侶・修験者など）、その他（巫女・ト占師・祈祷師・新宗教の教師など）

⇒宗教者の場合、聞き取りには一層の注意が必要である。

⇒できるだけ複数の相手に挨拶をし、了解を取りつけておく。

2) 事前調査

*研究対象を理解すること

①特定信仰の調査の場合

事前調査のあり方が調査の成否を大きく左右する。できるだけ多くの関係文献を渉猟することが必要。調査の目的を明確にすること。どのようなことに興味をもち、何を調べようとするのか、何のための調査なのか。調査や研究の対象について、事前の知識をもつように努めること。

⇒県史・市町村史の民俗に関する記載

各自治体が刊行する民俗資料調査報告書

日本民俗地図（文化庁）など

②特定地域の調査（民俗誌的な調査）の場合

現地調査のあり方が成否の鍵を握るが、事前調査も軽視できない。

調査項目は、社会生活・経済生活・言語生活など、人間生活の全領域に及ぶ。

⇒調査は調査者自身の力量に負うところが大きい。

⇒当該地域の信仰に関する文献は極力目を通すことが肝心。

宗教法人名簿の活用

3) 現地調査

①地域の概況調査：ジェネラルサーベイ

地域の有識者をたずねてアドバイスを受ける。

⇒教育委員会（文化財担当）

市町村史編さん室の担当者

郷土博物館や資料館（学芸員）

②話者の選び出し

話者は自分の力で探すしか方策はない。

⇒口コミの利用：有力者を頼って紹介を受ける

農山村：区長・町会長・農漁協長・組合長など

都市：氏子総代・（寺の）役員など

③聞き取り調査

話者と対面して聞き取り調査を行う。

⇒訪問日時を約束をしたうえで訪ねる（調査予約）

手土産を持参する。

相手の気持ちが打ち解けたところを見計らって、本格的な聞き取りに入る（ノートをだす）

相槌を適宜うつ。聞き上手になること。

調査項目を作成し、聞き漏らしは現地で解決する。

調査は正確でなければならない。

複数の話者から聞き取りする。

*階層性と時代性に留意する。

⇒語られた資料が、その地域の特殊に属するのかそれとも普遍的なことなのか、十分に吟味する必要がある。地域社会の中で話者の置かれた立場や占める位置によって、語られる内容に差異がある。またその民俗現象が現在なお継続していることなのか、それとも過去に行われていたことなのか。

④記録用紙

カード・ノート・手帳など。

⑤帰宅後の作業

調査を終えて帰宅（帰宿）したら、できるだけ早くこのノートを点検し補正をしておく。共同調査

の場合、情報を共有できるようにする。

⑥写真の撮影

4) 主な調査対象

①地名と地図

地名は人間の歴史を知る重要な「のぞき窓」である。地名が「どういう意味」で「いつ命名されたか」に関心。地名研究は村落社会研究において基礎データを提供する。

⇒概況を知る：地名大辞典

小字の収集：土地台帳・地籍図

各種地図の活用

②神社

主な調査内容として、以下の6つがあげられる。

イ) 社名の変遷と俗称

ロ) 祭神名と神格

ハ) 社格の変遷と社領

⇒時代ごとの為政者との関係をしるうえで重要。神田・祭田・小作関係など

ニ) 氏子と神官等の祭祀組織

⇒祭祀組織の理解、信仰圏の把握と理解に役立つ。氏子圏・氏子組織、宗教組織。

ホ) 祭礼・行事

⇒神社と人間とのかかわりをもっともリアルに伝えてくれる。

③寺院

④祭礼

Ⅲ 宗教地理学の実践とフィールドワーク

Ⅲ-1 宗教の空間構造を考える：信仰圏の研究

テキスト：松井 2003；松井 2007；Matsui2013

1) テーマの設定

2) 研究史の俯瞰

3) フィールドの決定

4) 現地調査の実践

① 神社資料・講碑の筆写

② 神社関係者への聞き取り

③ 崇敬者への聞き取り

④ 門前町での聞き取り

5) 調査のフィードバック

6) 成果と課題

Ⅲ-2 宗教景観の意味を考える：教会群と宗教ツーリズムの研究

テキスト：松井 2013

1) テーマの設定

2) 宗教研究の切り口としてのツーリズム

3) 現地調査の実践

① 行政資料の利用と聞き取り

② 信徒への聞き取り

③ 景観をどう読むか

4) 研究をまとめ、人びとに還元すること

Ⅲ-3 宗教を通して地域社会を考える：宗教組織の研究

テキスト：卯田ほか2012；Uda et al. 2013

- 1) テーマの設定：宗教から地誌を描く
- 2) 地域調査（集落調査）の方法
- 3) 調査項目・方法
- 4) 論文にまとめる
- 5) 追加調査としてのアンケートの有効性

Ⅳ おわりに

参考文献

- 岩鼻通明（2001）：宗教景観の構造．有藪正一郎・遠藤匡俊・小野寺 淳・古田悦造・溝口常俊・吉田敏弘編『歴史地理調査ハンドブック』古今書院，146-149.
- 磯岡哲也（1994）：社会調査を通してみた宗教．井上順孝編『現代日本の宗教社会学』世界思想社，197-229.
- 池上良正（1996）：宗教現象のフィールドワーク．井上順孝・月本昭男．星野英紀編『宗教学を学ぶ』有斐閣選書，125-143.
- 井上順孝・孝本 貢・塩谷政憲・島菌 進・対馬路人・西山 茂・吉原和男・渡辺雅子（1986）：『新宗教研究調査ハンドブック』雄山閣.
- 卯田卓矢・益田理広・金 錦・細谷美紀・久保倫子・松井圭介（2013）：入善町道市地区における浄土真宗の講組織と維持要因：地区の社会構造に着目して．人文地理学研究，**33**，67-86.
- 浦西 勉・古家信平・松崎憲三（1987）：民俗調査の方法と基礎知識 8 信仰．上野和男・高桑守史・福田アジオ・宮田 登編『新版 民俗調査ハンドブック』吉川弘文館，134-159.
- 宗教社会学の会編（2007）：『宗教を理解すること』創元社.
- 田中正明・長谷川匡俊・新城美恵子・平野榮次・北村皆雄（1987）：民間信仰調査の方法．圭室文雄・平野榮次・宮家 準・宮田 登編『民間信仰調査整理ハンドブック 下・実際編』雄山閣，51-102.
- 平野榮次・大矢良哲・水谷 類・茂木 栄（1987）：民間信仰調査上の心構えと手順．圭室文雄・平野榮次・宮家 準・宮田 登編『民間信仰調査整理ハンドブック 下・実際編』雄山閣，2-50.
- 中川 正（1997）：『ルイジアナの墓地—死の景観地理学—』古今書院.
- 松井圭介（2003）：『日本の宗教空間』古今書院.
- 松井圭介（2007）：宗教の空間構造を知る：信仰者はどこにいるのか．梶田 真・仁平尊明・加藤政洋編『地域調査ことはじめ—あるく・みる・考える—』ナカニシヤ出版 188-198.
- 松井圭介（2013）：『観光戦略としての宗教：長崎の教会群と場所の商品化』筑波大学出版会.
- 三木一彦（2010）：『三峰信仰の展開と地域的基盤』古今書院.
- Matsui, K. (2013) : *Geography of Religion in Japan: Religious Space, Landscape, and Behavior*. Tokyo: Springer.
- Uda, T., Mashita, M., Hosoya, M., Jin, J., Kubo, T. and Matsui, K. (2013) : Discussions on the regional characteristics of the Jodo Shinshu (True Pure Land Buddhism) association in the Kurobe River alluvial fan – A case study of Doichi, Nyuzen Town. *Tsukuba Geoenvironmental Sciences*, **9**, 3-11.